

杜甫「送高三十五書記」詩における高適批評

川 口 喜 治

一

本稿は、杜甫の「送高三十五書記」詩（以下「送高」詩と略称する）の詩句の表現が高適の詩歌に依拠したかのような、いわば高適詩を典故とする引用のモザイク的な作品となっており、かつそれがそのまま高適の文学や人物の特徴を捉えた批評となっているのではないかということについて検討しようとするものである。

杜甫の詩歌が、詩人やその詩才・詩風についての批評に代表される文学批評や、人物の特徴を捉えた批評的描述に特徴があることは、諸家によってつとに指摘されてきたところである。人物描写については賀知章、李白、張旭らを生きたと描き出した「飲中八仙歌」^①（仇兆鰲『杜詩詳註』巻一・81頁）を代表例として挙げる事ができよう。

杜甫の詩歌における文学批評的な特質については「戯爲六絶句」（巻十一・898頁）^②が採りあげられることが多い。伊藤正文氏は「六絶句」について「難解な作品でありながら、彼の文学観を表示したものとして有名である。彼はこの六絶句において、文学遺産の継承と創造の問題を論ずるとともに、当時の文学風潮に存在する偏向に対して痛烈な批判を行なっている。」^③と、その文学批評的性質を概括している。また伊藤氏は「盛唐詩には、詩をもつて文学を論ずる作品が、従来よりも飛躍的に増加する傾向を示す。」「単に儀礼の域にとどまらず、積極的に批評意識を働かす詩人も、決して少なくはない。その筆頭が杜甫であり、彼の友人たる高適・岑参・李白・王維らも、その例にもれない。」^④と、盛唐詩における杜甫を筆頭とした文学批評の傾向を指摘される。またこの文学批評は過去の詩人や作品に向けられたものだけでなく、同時代の詩人に

対してもなされている。その批評方法の特徴について伊藤氏は「建安詩人や謝靈運・鮑照の文学でもつて、相手の作品を評価する風潮が、かなり普遍的であったことを知るべきである。盛唐詩の底辺の一面を察すべき好例であろう。しかもこのような現象が、盛唐に先立つ初唐期に見られなかったことは、注意すべきことである。」と指摘される。^⑤

また盛唐詩人における同時代詩人に対する批評について、松浦友久氏は、周辺詩人に対して言及する場合、杜甫は「詩人としての側面」に重点を置いて言及する場合が多いのに対して、李白は対照的に詩人の詩才や詩風にふれることはまったくなく、あくまで親しい友人としての言及であること、さらに、高適・岑参が杜甫の態度に近く、王維・王昌齡が李白の態度に近いことを指摘されている。^⑥

伊藤・松浦両氏の指摘によれば、詩歌における文学批評は、盛唐において盛んとなり、また同時代の詩人やその詩才・詩風に対する批評は、杜甫にとりわけ特徴的に見られるものであったとすることができよう。

そして論者は本稿において、冒頭に述べたように、杜甫が同時代の詩人・高適を描く「送高」詩において、過去の詩人や文学によるのではなく、とりもなおさず高適自身の作品に基づいて、高適の文学や人物の特徴を評している態度について検討してみたい。それは換言するならば、杜甫詩（の出典）を高適詩によって注釈するということである。

ただこの方法は、高適とその文学に対する深い理解を前提とする。論者にそれが備わっているかはいへん心許ないが、ただ論者は以前より高適について考察しており、「送高」詩に接したときにこの詩の解釈においては上記の方法が有効ではないかと気づいたので、本稿において試みることにした。またそれ

は、杜甫詩の注釈や盛唐の文学批評の研究において、このような視点からの検討がさほど試みられてはいないのであるかとも思われるからであり、少なくとも「送高」詩に対してはこれまでになされなかった注釈方法であると考えられるからである。

二

杜甫の「送高」詩の表現が高適の詩歌を典故とするためには、「送高」詩の制作時点で、杜甫に、高適とその文学に対する深い理解があったことが前提となる。杜甫と高適の交遊は盛唐詩人間の交遊の中でも代表的なものとして知られており、その交遊においては当然文学的な側面が大きなものであったと思われる。以下にそのことについて簡単に確認しておく。

まず「送高」詩の制作背景と時期であるが、論者はかつて先行研究を整理し、次のように考えた。⁵⁾ 高適は、杜甫にこの作品を呈せられる以前、天宝八載(七四九)四十九歳にしてようやく手にした官職である陳留郡(汴州)封丘県(河南省封丘県)の尉を同十一載に任期中で辞し、長安にやってきている。同年、高適は隴右節度使(鎮所・鄯州湟水県・青海省樂都県)哥舒翰の判官・田梁丘なる人物の斡旋を経て、哥舒翰により左驍衛兵曹參軍に推薦され、哥舒幕府の掌書記の職に就いている。高適は、天宝十一載の秋から冬にかけての時期に、初めて河西・隴右の哥舒翰幕府に入幕し、同年冬哥舒翰に随って長安に戻り、翌十二載夏に再び河隴の地へ赴いた。そしてこの時、杜甫によって「送高」詩が作られたのである。なお哥舒翰は、十一載四月に安思順が河西節度使(鎮所・涼州姑臧県・神鳥県・甘肅省武威県)から朔方節度使に転任するのにもない、隴右節度使に加えて、実質的に河西節度使に就任しており、翌十二載に河西節度使に正式に就任したと考えられる。

次に、「送高」詩が作成されるまでの杜甫と高適の交遊について確認する。⁶⁾

まず、天宝三載の秋、杜甫と高適は李白とともに梁宋(今の河南省東部、開封市から商丘市にかけてのあたり)に遊んでいる。この当時のことを杜甫はのちに次のように回想している。大暦元年(七六六)夔州(治・奉節県・四川省奉節県)での作品「昔遊」(卷十六・1435頁)には「昔者與高李(原注・高適、李白、晚登單父臺。(昔者 高李と、晩に單父の台に登る。))とあり、また同年同所での作「遺懷」

(卷十六・1447頁)には「昔我遊宋中、惟梁孝王都。……憶與高李輩、論交入酒壚。兩公壯藻思、得我色敷腴。氣酣登吹臺、懷古視平蕪。(昔 我 宋中に遊ぶ、惟れ梁の孝王の都なり。……憶う 高李の輩と、交を論じて酒壚に入る。兩公 藻思壯んなり、我を得て色敷腴たり。氣酣にして吹臺に登り、古を懷いて平蕪を視る。))とある。特に後者からは、杜甫と高適と李白が「論交」交誼を結び、「藻思」詩文に関わる思いを述べあい、文学論をたたかわせることによって、お互いの文学的特質について理解を深めていったことが見て取れよう。また同じ時期、天宝三載の高適の作「宋中別周梁李三子」(孫欽善「高適集校注」120頁)¹⁰⁾に「李侯懷英雄、骯髒乃天資。方寸且無間、衣冠當在斯。(李侯 英雄を懷い、骯髒 乃ち天資なり。方寸 且し間無くんば、衣冠 當に斯に在るべし。))とあり、この「李侯」が李白である可能性がとくに聞一多によって指摘されている。¹¹⁾

次に、天宝五載の夏から冬にかけて、杜甫と高適は李白とともに齊魯に遊び、冬には北海郡(青州、治・益都県・山東省益都県)の太守・李邕を訪ねている。李邕は、『文選』の注釈者・李善の息子であり、当時の文壇の長老であった。この交遊の過程、特に李邕との面談において、文学について様々に意見が交換されたことは想像に難くない。杜甫の「春日憶李白」(卷一・52頁)は、この交遊後の天宝六載、長安において李白を追憶した作品であり、後半には「渭北春天樹、江東日暮雲。何時一樽酒、重與細論文。(渭北 春天の樹、江東 日暮の雲。何の時に一樽の酒もて、重ねて与に細かに文を論ぜん。))とある。もう一度いっしょに詩文について語り合いたいと言うのは、天宝三載と同様、五載の交遊においても文学論をたたかわせたこと、且つそれが杜甫にとって楽しく有意義な時であったことを物語っている。これに関して、王運熙・楊明両氏は「隋唐五代文学批評史」において、杜甫詩における「論文、論詩」の例を「春日憶李白」を含めて七例挙げ、杜甫が詩歌を論ずるのに熱心であったことを指摘している。¹²⁾ いまその中から一例挙げると、乾元二年(七五九)秦州(治・成紀県・甘肅省秦安県北西)の作「寄彭州高三十五使君適虢州岑二十七長史參三十韻」(卷八・638頁)の末二句に「會待妖氛靜、論文暫裹糧。(會待妖氛の静まるを待ちて、文を論ずるに暫く糧を裹まん。))とある。高適・岑参に対し、安史の乱がおさまったならば詩文を論ずるために訪ねたいことが述べられている。高適が杜甫の交遊において文学論議の相手であったことが、ここからも判明しよう。

また杜甫が天宝五載の交遊に言及する詩句としては、広徳二年(七六四)成

都において、刑部侍郎・左散騎常侍となつて長安に還る高適に寄せた「奉寄高常侍」（卷十三・1122頁）の「汶上相逢年頗多、飛騰無那故人何。（汶上 相逢う 年頗る多し、飛騰 故人を那何ともする無し）」がある。上句の「汶」水は山東省兗州市や曲阜市の北を流れる河川である。二句には齊魯の交遊時にはともに布衣であつたのが長い年月を経た今、その身分がかくもかけ離れてしまつたという杜甫の複雑な思いが読み取れよう。それと同時に当時の交遊が、（少なくとも杜甫にとって）二人の交遊の起点となつた記念すべき有意義な時間であつたことが読み取れるのではなからうか。

三

前節で述べたように、杜甫は、「送高」詩作成以前、高適との交遊において詩文についての議論をたたかわせ、それを通じて高適とその文学に対して理解を深めていったものと考えられる。

本節では、第一節で述べたように「送高」詩の詩句の表現が高適詩に基づくと考えられる箇所について検討してゆく。もとより全ての詩句が高適詩に拠るものではないが、詩句がそのように発想され表現された理由を高適詩に求められる箇所も少なくはないと思われるのである。

まず「送高」詩の全文を掲げる。

「送高三十五書記十五韻」（卷二・126頁／「詳註」の詩題には「十五韻」とあるが実際には三十二句の十六韻である。）

- 1 崆峒小麦熟 崆峒 小麦熟す
- 2 且願休王師 且つ願わくば王師を休めよと
- 3 請公問主將 請う 公よ 主將に問え
- 4 焉用窮荒爲 焉んぞ荒を窮むるを用て為さんと
- 5 饑鷹未飽肉 饑鷹 未だ肉に飽かざれば
- 6 側翅隨人飛 翅を側めて人に隨いて飛ぶ
- 7 高生跨鞍馬 高生の鞍馬に跨るは
- 8 有似幽并兒 幽并の兒に似たる有り
- 9 脱身簿尉中 身を簿尉の中より脱し
- 10 始與捶楚辭 始めて捶楚と辞す

- 11 借問今何官 借問す 今は何の官にて
- 12 觸熱向武威 熱を觸して武威に向かうやと
- 13 答云一書記 答えて云う 一書記
- 14 所愧國士知 愧ずる所は國士の知なりと
- 15 人實不易知 人は實に知り易すからず
- 16 更須慎其儀 更に須らく其の儀を慎むべし
- 17 十年出幕府 十年 幕府より出づれば
- 18 自可持旌麾 自ら旌麾を持す可し
- 19 此行既特達 此の行 既に特達
- 20 足以慰所思 以て思う所を慰むるに足る
- 21 男兒功名遂 男兒 功名遂ぐるは
- 22 亦在老大時 亦た老大の時に在り
- 23 常恨結歡淺 常に恨む 歡を結ぶこと淺くして
- 24 各在天一涯 各おの天の一涯に在るを
- 25 又如參與商 又た参与商との如くにして
- 26 慘慘中腸悲 慘慘として中腸悲しむ
- 27 驚風吹鴻鵠 驚風 鴻鵠を吹き
- 28 不得相追隨 相追隨するを得ず
- 29 黃塵翳沙漠 黃塵 沙漠を翳い
- 30 念子何當歸 念う 子の何か當に歸るべき
- 31 邊城有餘力 辺城 余力有らば
- 32 早寄從軍詩 早く寄せよ 從軍の詩を

まず第七・八句「高生の鞍馬に跨るは、幽并の兒に似たる有り。」について。これは掌書記として河隴の哥舒翰幕府に赴く高適の堂々として颯爽たる姿を描いたものである。さてここで高適が「幽并の兒」と比喩されているのは何故であるるか。幽は、唐の行政区画としては幽州（治・薊県≡北京市）、并は并州（太原府、治・太原県・晋陽県≡山西省太原市南）であり、ここでは古代の幽州と并州の地方、おおむね戦国時代の燕（河北省北部から遼寧省の地方）趙（山西省北部の地方）の地方を指しているよう。

まず「幽并の兒」は、曹植「白馬篇」「白馬飾金鞵、連翩西北馳。借問誰家子、

幽并游侠兒。少小去鄉邑、揚聲沙漠垂。(白馬 金鞵を飾り、連翩として西北に馳す。借問す 誰が家の子ぞ、幽并の游侠の兒。少小 郷邑を去り、声を沙漠の垂に揚ぐ。) (『魏詩』卷六)を語彙の典故としており、そこに描かれた男だての姿が、高適の姿に重ねられていることは間違いない(もともと高適はこれから「揚聲沙漠垂」しようとするのであるが)。ただ私は、高適の颯爽たる姿を表現するのに「幽并」が用いられたことに敢えてこだわってみたいのである。

曹植詩に歌われるように、幽并はともに游侠の地方として有名であり、高適を「幽并の兒」と喩えるのは、高適詩に見られる交わりを重んずるといふ游侠の性格を、杜甫が高適の詩歌と人物の特徴として理解していたからではなからうか。高適の游侠的性格を知ることができる作品を掲げよう。

「邯鄲少年行」(38頁)は、開元二十年(七三二)から二二年、燕趙の地方へ旅遊したときの作品とされる。趙の邯鄲、唐の洛州邯鄲県(河北省邯鄲市)も遊俠で著名なまちである。

邯鄲城南遊俠子	邯鄲城南	遊俠の子
自矜生長邯鄲裏	自ら矜る	邯鄲の裏に生長するを
千場縱博家仍富	千場 博を縦にして	家仍お富み
幾處報仇身不死	幾処か 仇に報じて身は死せず	
宅中歌笑日紛紛	宅中 歌笑 日に紛紛たり	
門外車馬如雲屯	門外 車馬 雲屯するが如し	
未知肝膽向誰是	未だ知らず 肝膽 誰に向かいて是とするかを	
令人却憶平原君	人をして却って平原君を憶わしむ	
君不見今人交態薄	君見ずや 今人の交態の薄きを	
黃金用盡還疏索	黃金 用い尽くせば 還た疏索たり	
以茲感歎辭舊遊	茲れを以て 感歎して旧遊を辭し	
更於時事無所求	更に時事において求むる所無し	
且與少年飲美酒	且く少年と美酒を飲み	
往來射獵西山頭	往來して射獵せん 西山の頭	

「邯鄲少年行」は、宋・鮑照「結客少年場行」を巻頭に配する『樂府詩集』(卷六) 雜曲歌辭六におさめれる樂府題である。一般的に、樂府は以前の作品のテーマにならいつつ作られるものである。この作品から高適とその文字に游侠の性格を特徴して認めることには慎重を要するが、一方で、遊俠をテーマ

とした詩歌を制作しているということ自体を見逃してはならないであろう。いまここでは「君不見」の聯に示された「金の切れ目が縁の切れ目」的な現今の功利主義的交わりの軽薄さを批判している点に注目しておきたい。

次に天寶初め、五、六載の頃の作とされる「贈任華」(160頁)を掲げる。

丈夫結交須結貧	丈夫	交わりを結ぶは須く貧と結ぶべし
貧者結交始結親	貧者	交わりを結ばば交わり始めて親し
世人不解結交者	世人の結交を解せざる者は	
唯重黃金不重人	唯だ黃金を重んじて人を重んぜず	
黃金雖多有盡時	黃金は多しと雖も尽くる時有り	
結交一成無竭期	結交は一たび成らば竭くる期無し	
君不見管仲與鮑叔	君見ずや 管仲と鮑叔と	
至今留名名不移	今に至るも名を留めて 名の移らざるを	

この作品では、「邯鄲少年行」の「君不見」の聯に示された金銭を度外視した交わりの大切さにテーマが絞られている。故事として著名な「管鮑の交」を挙げ、貧窮時の交わりこそ永遠の価値を持つ真実のものであり、現今の金銭のみを重要視する功利的な交わりを否定している。

これら二首(もちろん現存する作品以外にもこの二首と同様の内容を備えたものが存在したと推測される)に接した杜甫は、利益を度外視し、交わりを重んずるといふ游侠の性格を、高適の詩歌と人物の特徴として理解したのではなからうか。またこのことに深く関連すると思われる作品が杜甫に存在する。天寶十一載の作とされる「貧交行」(卷二・133頁)である。

翻手作雲覆手雨	手を翻せば雲と作り 手を覆すれば雨
紛紛輕薄何須數	紛紛たる輕薄 何ぞ数うるを須いん
君不見管鮑貧時交	君見ずや 管鮑貧時の交わりを
此道今人棄如土	此の道 今人 棄てて土の如し

「管鮑の交」のごとき貧窮時の交わりこそ真の交わりであり、自己の利害や都合によって交わりを翻す「輕薄」な現今の世態を批判している点で、高適の作品と共通する。この作品が系年通りであるならば、その制作にあたって高適の「邯鄲少年行」「贈任華」、特に後者が強く意識されていたであろうと考えられる。

ついで「鞍馬に跨る」「幽并の兒」の比喩の由来について別の点から考えて

みる。高適はこれまでに二度、燕趙の地を訪れている。一度目は先述のように「邯鄲少年行」が作られた開元二十年から二十二年の間の布衣としての旅遊、二度目は天宝九載から十載、封丘県尉として送兵の任務を帯び、居庸関（北京市の西北、河北省昌平県西）を越えて清夷軍（河北省懷来県東）まで赴いたときである。一度目の旅遊の時、高適は營州（治・柳城県＝遼寧省朝陽市）において「營州歌」（37頁）という作品を作り、その地の異民族の若者の豪快な生態を活写している。

營州少年厭原野 營州少年 原野に厭^あ

皮裘蒙茸獵城下 皮裘 蒙茸 城下に獵す

虜酒千鍾不醉人 虜酒 千鍾 人を酔わしめず

胡兒十歲能騎馬 胡兒 十歲にして能く馬に騎す

これは幽并の兒（若者）を描いたものではないけれども、杜甫は、国境に近い地域の騎馬する勇壮な若者に対する高適の愛好をこのような作品から理解し、「送高」詩作成当時五十三歳であった高適に対して、その騎馬の颯爽たる姿を幽并の若者と表現し、はなむけとしたのではなからうか。

また、開元二十六年制作された高適の代表作「燕歌行」（80頁）が一度目の燕趙旅遊での見聞・経験を踏まえているように、二度にわたる燕趙への旅遊は高適の経歴と詩作において重要な意味をもつものであったと考えられる。杜甫が西域の辺境へ向かう高適を東北国境地域の「幽并」をもって比喩したのは、そのようなことを理解していたことにも拠るのではなからうか。

*

次に第九・十句「身を簿尉の中より脱し、始めて捶楚と辞す。」である。これが、高適が天宝八載から十一載、封丘県尉在任中の作である「封丘縣」（170頁）に依拠していることは、『詳註』や楊倫『杜詩鏡詮』（巻二）などにおいてつとに指摘されている。作品を掲げよう。

我本漁樵孟諸野 我は本と孟諸の野に漁樵し

一生自是悠悠者 一生 自らはれ悠悠たる者なり

乍可狂歌草澤中 乍^{むし} 草沢の中に狂歌すべきも

寧堪作吏風塵下 寧^{なん} 風塵の下に吏と作るに堪えんや

祇言小邑無所爲 祇^{ただ} 小邑 為す所無しと言えども

公門百事皆有期 公門 百事 皆期有り

拜迎官長心欲碎 官長を拜迎して 心碎けん欲し
 鞭撻黎庶令人悲 黎庶を鞭撻して人をして悲しましむ
 歸來向家問妻子 歸り來たりて家に向いて妻子に問えば
 舉家盡笑今如此 家を挙げて尽く笑う 今は此くの如しと
 生事應須南畝田 生事 必に南畝の田を須うべし
 世情付與東流水 世情は付して東流の水に与えん
 夢想舊山安在哉 夢想す 旧山は安くにか在るや
 爲銜君命日遲迴 君命を銜むが為に日に遲迴す
 乃知梅福徒爲爾 乃ち知る 梅福は徒らに爾か為すを
 轉憶陶潛歸去來 轉^{うつ} 憶う 陶潛の歸去來を

第一句の「孟諸」は高適が布衣時代に長く暮らした宋州の治所・宋城県（河南省商丘県）の東北にあった沢。さて傍点を付した第四句から第八句に、県の最下級の官職たる県尉としての職務の不遇が描かれている。小さな県の尉ゆえにたいした勤めもないと思っていたところ、全ての仕事に期限がある繁忙さや、長官を出迎え頭を下げて挨拶をせざるを得ない屈辱、役目とはいえ民衆に鞭打ち自らも悲しみを懐く様子が表白されている。四十九歳にして初めて手にした封丘県尉という官職を任期中中で辞し²⁰ 長安にやってきた高適のこの作品が、長安にいた杜甫に示されたことは間違いないからう。また天宝五載の齊魯での交遊後の作品をお互い披露しあったことであろう。そして長安で布衣の生活を続けていた杜甫にとって、高適が県尉を任期中中で辞したことは、自身が布衣であるゆえにいつそう強い印象を与えたはずである。さらに高適はこの作品に歌ったように隠棲することになったのではなく、更なる飛躍を求めて辺境の掌書記に就任したのであり、杜甫にとってまさに「送高」詩第十九句にあるように「特達」と評すべきことであった。

そして杜甫が「県尉の身分から抜け出し、やっと民衆に鞭打つことにも別れを告げた」と、高適にとって必ずしも誇るべきではないキャリアを読み込むのは、民衆にむち打つことへの高適の躊躇に杜甫が共感したからであろうし、さらには右の詩に見られる県尉としての職務の不遇描写の裏側にある高適の強い自負²¹、県尉を辞してその自負にかなう新たなキャリアを求めた高適の強い意志を理解したからではなからうか。飛躍せんとする高適において捨て去られるべき失意の経歴として取えて描かれる必要があったのである。なお「送高」詩

の第五・六句に、高適を比喻して「饑鷹 未だ肉に飽かざれば、翅を側めて人に随いて飛ぶ。」とあるが、それは飢えた鷹は肉に飽きたならば翼を大きく伸ばしはばたかせ、自由に飛び去ってしまうということである。不遇の時に仕方なく翼をすぼめて人の意のままに飛ぶという態度の裏には、強烈な自負の精神が秘められているという点で、ここを通ずるものがあるろう。

ところでこの第五・六句の典故は『三國志』(巻七) 魏書・張邈傳に見られる、曹操が呂布を評した言葉であり、また『晉書』(巻二三) 載記に見える前秦の君主苻堅に仕えた慕容垂を描く言葉である。吉川幸次郎氏によれば、杜甫はこの比喻をほかにもしばしば用いるとのことであるが、高適に対して用いた理由はやはり高適詩に求めることができるのではなからうか。天寶九載、睢陽(宋城)での高適の作品に「睢陽酬暢大判官」(177頁)があり、その中に辺境経営に対する自らの意見を開陳する部分がある。

降胡滿薊門	降胡	薊門に満ち
一一能射鵬	一一	能く鵬を射る
軍中多燕樂	軍中	燕樂多く
馬上何輕趨	馬上	何ぞ輕趨たる
戎狄本無厭	戎狄	は本より厭く無し
羈縻非一朝	羈縻	は一朝に非ず
飢附誠足用	飢えて附せば	誠に用うるに足るも
飽飛安可招	飽きて飛ばば	安くんぞ招くべけんや

「薊門」は、北京の西北にある居庸関であり、高適は燕趙旅遊で訪れている。つまり右の八句は、高適の実際の体験や見聞に裏打ちされた意見であると考えられる。引用の前半四句は、帰順した異民族への優遇を描いていよう。それを承けて後半四句には、融和的な羈縻政策は長い間試みられてきたのだが、飽くことを知らない異民族に対しては成果が上がっておらず、末二句には異民族は飢えた鷹と同じであることが述べられる。この末二句の典故は「送高」詩の第五・六句と同じである。ところがかつて論じたことであるが、高適詩に見える辺境経営に対する考えは強硬なものであり、融和的な方策を否定する右の詩句はそれを示す一例である。このような強硬な考え方は杜甫と相違していよう。そしてそのような考え方の違いを意識して、高適が夷狄に用いた比喻を、杜甫は批判的意図を込めて敢えて第五・六句で高適に対して用いたとは考えられな

いであろうか。そうであるとするれば、封丘県尉としての挫折的な経験を描くこととともに、杜甫の筆はかなり大胆である。

ここでもう一例、高適の辺境政策にかかる考え方を示す作品を挙げよう。一度目の燕趙旅遊の時の作「塞上」(34頁)である。

東出盧龍塞	東のかた盧龍塞を出で
浩然客思孤	浩然 客思 孤なり
亭候列萬里	亭候 萬里に列なり
漢兵猶備胡	漢兵 猶お胡に備う
邊塵滿北溟	邊塵 北溟に満ち
虜騎正南驅	虜騎 正に南に驅く
轉門豈長策	轉門は豈に長策ならんや
和親非遠圖	和親は遠図に非ず
惟昔李將軍	惟 ^{おも} 昔 李將軍
按節出皇都	節を按じて皇都を出で
總戎掃大漠	戎を総べて大漠を掃し
一戰擒單于	一戰 單于を擒にす
常懷感激心	常に感激の心を懷き
願效縱橫謨	縱橫の 謨 ^{はかりごと} を效さんことを願う
倚劍欲誰語	劍に倚りて誰にか語らんと欲す
關河空鬱紆	關河 空しく鬱紆たり

第一句の「盧龍塞」はいまの河北省遷西県北方にあつた長城。一首、本土を侵す異民族に対して、「轉門」つまりあちこちで局部的に戦つたり、「和親」つまり羈縻、懷柔をしたりすることはその場しのぎの計略にすぎない(異民族はいつ叛するともかぎらない)と辺境政策を批判し、総力戦で一氣に異民族の王を捕らえた漢の將軍・李広のような戦略を支持している。二度目の燕趙旅遊の後に作られた前掲の「睢陽酬暢大判官」と同様、羈縻政策破綻下における異民族への懷柔策に対する批判を見ることができよう。

ところで「送高」詩の冒頭四句「崆峒 小麦熟す、且つ願わくば王師を休めよと。請う 公よ 主將に問え、焉んぞ荒を窮むるを用て為さんと。」について、吉川氏は第一・二句が「高適がそのもとに赴任して仕える主將哥舒翰に対する

希望、あるいは批判」とされ、第四句について「杜詩を貫く反戦の思想」の現われとされる。また四句全体について「詩の主題である高適への送別とは、直接には関係しない」とされる。⁽²⁵⁾ 哥舒翰に対する希望・批判、杜甫の反戦思想については全くその通りであると論者も考えるが、この四句は、高適と関係しないのであろうか。上に述べたように、杜甫が、高適の詩歌に見られる境界経営に対する強硬性を自らの考え、立場と相違するものとして認識していたとすれば（両者の間で議論が戦わされたことでもあろう）、四句は、高適にも向けられたものと考えすることはできないであろうか。つまり「君の強硬な考え方は哥舒翰に共通するであろうが、安易に哥舒翰に追従したり、彼を煽ったりしないであらう」というふうな戒めの助言的な意味あいも持つのではなからうか。「送高」詩の表現が高適詩に依拠しているという視点に立った場合、冒頭四句をこのように捉える可能性も出てくると考えられる。吉川氏が「直接には関係しない」と述べられるのは、論者にはこの意味で首肯できるのである。

*

さてここで論の流れの都合上、これまでに検討した高適詩に見られる遊俠的な性格と封丘県尉としての不遇が、杜甫以外の詩人によって描かれた例を挙げておこう。李頎「贈別高三十五」（『全唐詩』卷一三三）である。

五十無産業 五十にして 産業無く
心輕百萬資 心は百万の資を輕んず
屠酤亦與羣 屠酤 亦た与に群れ
不問君是誰 君が是れ誰なるかを問わず

飲酒或垂釣、狂歌兼詠詩。焉知漢高士、莫識越鴟夷。寄跡棲霞山、蓬頭睢水湄。忽然辟命下、衆謂趨丹墀。沐浴著賜衣、西來馬行遲。能令相府重、且有函關期。漚俛從寸祿、舊遊梁宋時。瞻瞻邑中叟、相候鬢如絲。官舍柳林靜、河梁杏葉滋。摘芳雲景晏、把手秋蟬悲。

小縣情未愜 小県 情 未だ愜わすとも
折腰君莫辭 折腰 君 辞する莫かれ
吾觀主一作聖人意 吾 主人の意を觀るに
不久召京師 久しからずして京師に召されん

李頎が封丘県尉となった高適に呈した作品であり、高適が布衣であった時から、有道科に挙げられて封丘県尉の職に就くまでの事跡をうたっている。冒頭

四句では、五十にして産業（地主としての土地経営）に従事せず、富貴を輕んじ、荒くれが多かった屠殺業・酒販業の者と交遊し、また交遊相手が誰であるかを問わないという、アウトサイダー的な生熊が描かれている。李頎は、杜甫同様、高適の詩歌や生熊に金錢を度外視した交わりを重んずる遊俠的態度を特徴として見出していたと考えられる。末四句には、高適の県尉としての不遇感とそれに対する励ましが述べられている。また「小県」の聯は、高適が封丘県尉の不遇感を歌った次の「封丘作」（1771頁）に依拠していると考えられる。

州縣才難適 州県 才 適い難し
雲山道欲窮 雲山 道 窮まらんと欲す
揣摩慙點吏 揣摩 點吏に慙し
棲隱謝愚公 棲隱 愚公に謝す

李頎詩の「小縣情未愜」は高適詩の「州縣才難適」に、句の構成が類似している。後者は、州県の役職は自分ようなちっぽけな才知ではつとまらないという謙讓の表現であるが、実際には、自分には役不足であることを述べていよう。そして詩の後半では、狡猾な下つ端吏員のように上役の気持ちを押し量つている卑屈な態度を恥じ、そうかといって春秋・斉の愚公のように隱者としての途を選んでいない現状を恥じている。また李頎詩の「折腰 君 辞する莫かれ」は、高適詩の第四句や前掲「封丘縣」に見られる隱棲への思いを押しとどめようとする忠告と考えられよう。本稿は、杜甫「送高」詩を高適詩によって注釈することを目指しているが、はからずも李頎の「贈別高三十五」にも同様の方法を当てはめることが判明した。このことについて本論ではこれ以上は追求せず、指摘だけにとどめておきたい。

*

次に第十三・十四句「答えて云う 一書記、愧ずる所は国士の知なりと。」について。杜甫の問いに対する高適の返答のセリフとして描かれている。「ただの掌書記にすぎない」といういささかばつの悪そうな言葉に続き、それでも国士としての知遇を得たことをかたじけないと強調する。実際にそのような話が交わされたことは想像に難くないが、国士としての「知」と表現するのは、やはり高適詩に依拠していると考えられる。

かつて指摘したことがあるが、高適詩全体に於いて「知己」という語彙の多さが目立つ。その数は、「知己」十九例で、唐代の代表詩人の中でも極めて多い。

また同類の「知音」が二例ある²⁶⁾。無官の期間が約五十年と長かった高適にとって、自己の才能を正当に評価してくれる「知己」の存在は常に強く希求されていたのであろう。杜甫は、そのような高適の詩語と生態の特徴を捉え、詩中の高適に「国士としての知遇を得たのだ」という発言をなさしめたのであろう。高適詩における「知己」の例をいくつか挙げる。

去郷不遠逢知己 郷を去ること遠からずして知己に逢う
握手相歡得如此 手を握りて相歡ぶこと此くの如し

〔題李別駕壁〕(2頁)

憶昔遊京華 憶う 昔 京華に遊び

自言生羽翼 自ら言う 羽翼を生うと

懷書訪知己 書を懷きて知己を訪ね

末路空相識 末路 相識空し

〔酬龐十兵曹〕(6頁)

可歎無知己 歎ず可し 知己無きを

高陽一酒徒 高陽の一酒徒

〔田家春望〕(26頁)

平生感知己 平生 知己に感ず

方寸豈悠悠 方寸 豈に悠悠たる

〔東平旅遊奉贈薛太守二十四韻〕(142頁)

長鳴謝知己 長鳴 知己に謝す

所媿非龍媒 媿する所は龍媒に非ず

〔和賀蘭判官望北海作〕(193頁)

賦詩感知己 賦詩 知己に感じ

獨立爭愚蒙 獨立 愚蒙を争う

〔奉寄平原顔太守并序〕(245頁)

淺才登一命 淺才 一命に登り

孤劍通萬里 孤劍 万里に通ず

豈不思故郷 豈に故郷を思わざらんや

從來感知己 從來 知己に感ず

〔登隴〕(218頁)

ここで掲げた例は、すべて高適にとつての知己の意味で使われている。一例

目は布衣の時に、別駕の職にある李なる人物に呈した詩であり、全体は掲げないが就職の斡旋を求める作品と判断される。二例目は、高い矜持を持ち都に出たにもかかわらず、自己の才能を認めてくれる人物がいなかった失意を述懐する。三例目は、漢の高祖に才能を見いだされその覇業を助けた酈食其(『史記』卷九七・酈生傳、朱建傳)に自らをなぞらえて知己の不在を嘆く。四例目は、三例目までと同様布衣の時代の作で、詩を呈した相手、薛太守(薛自勸)を知己と呼ぶ。五例目は、封丘県尉として送兵の役目を帯びて清夷軍まで赴いたときの作であり、この役目は高適にとって失意を募らせるものであった。詩を呈した相手、賀蘭判官(賀蘭進明)を知己と呼んでいる。六例目は、掌書記の時、平原太守顔真卿におくった作品。知己は顔を指す。布衣の時代、有道科に挙げられるにあたり高適の詩文を推薦してくれた顔(当時は觀察御史)を知己としたものである。最後の例は、天宝十一載、河隴に掌書記として赴く途中、隴山での作であり、知己は自らを採用してくれた節度使・哥舒翰を指している。そして「送高」詩の「国士の知」という表現は、杜甫が高適詩における「知己」の多用を特徴として認識したものであり、直接的には最後の例を強く意識したものであると考えられる。

またこのように「知己」に対する執着が強かったゆえに、現実に「知己」を得た高適の喜びは大きかったに違いあるまい。そう考えると、杜甫が「送高」詩の第十五、六句に「人は実に知り易すからず、更に須らく其の儀を慎むべし。」と述べるのは、感激のあまり調子に乗りすぎないように、くれぐれも言動を慎重にすべきだという戒めの言葉であると捉えることができよう。

*

第十七句から第二十二句「十年 幕府より出づれば、自ら旌塵を持す可し。此の行 既に特達、以て思う所を慰むるに足る。男兒 功名遂ぐるは、亦た老大の時に在り。」は高適の将来の成功を述べて激励した句である。論者はかつて高適の送別詩の措辞の特徴として、離別の悲哀を抑えつつ旅立つ者に対してその将来の成功に言及し、その旅立ちを激励するということ、いわば樂觀的な態度を指摘した²⁹⁾。杜甫が高適を送るこの措辞も、「十年」の後、「老大の時」の成功に言及する点で、高適の送別詩の特徴を捉え、反映したものと考えることができよう。かつての指摘と重なるが、高適の送別詩の例をいくつか掲げる。

末路終別離 末路 終に別離す

不能強悲哀 強いて悲哀する能わず

男兒爭富貴 男兒は富貴を争う

勸爾莫遲迴 爾に勸む 遲迴する莫かれ

「宋中遇劉書記有別」(10頁)

離別未足悲 離別 未だ悲しむに足らず

辛勤當自任 辛勤 当に自ら任うべし

吾知十年後 吾 知る 十年の後

季子多黃金 季子の黄金多きを

「別王徹」(13頁)

立談多感激 立談 感激多し、

行李即嚴凝 行李 即ち嚴凝たり

離別胡爲者 離別 胡爲る者ぞ

雲霄遲爾昇 雲霄 爾が昇るを遅つ

「饒宋八充彭中丞判官之嶺外」(131頁)

すべて「送高」詩制作以前の作品と見做され、また引用は作品の末尾である。

一例目は、科擧の資格試験(礼部試)に合格するも、任用試験(吏部試)に不合格となり、節度使の掌書記の職を得て任地に旅立つ者を送った詩である。二例目は、楚の地方(南方)で挫折し北の故郷へ帰る途中の者を宋州宋城で送ったものである。三例目は、嶺南五府経略採訪使(広東省広州市)彭果の幕僚となつて遙か遠くの地に旅立つ者を送った時の作品。三首とも高適の布衣時代の作品である。一例目は将来の富貴(富裕と立身出世)をもつて激励する。二例目は現在の不遇に耐えたのち、まさしく「送高」詩と同様「十年後」の金銭的成功に言及し励ます。三例目は将来の栄達を述べて激励する。繰り返すが、杜甫によつて、高適の送別詩に見られるこのような措辞がその詩歌の特徴として捉えられていたと考えられる。ところでやはりかつて指摘したことであるが、二例目の「別王徹」について南宋・嚴羽の『滄浪詩話』「詩評」に次のようにある。

古人贈答、多相勉之詞。蘇子卿云、願君崇令德、隨時愛景光。李少卿云、努力崇明德、皓首以爲期。劉公幹云、勉哉修令德、北面自寵珍。杜子美云、君若登台輔、臨危莫愛身。往往是此意。高達夫贈王徹云、吾知十年後、季子多黃金。金多何足道、又甚於以名位期人者。此達夫偶然漏逗處也。(高達夫の「王徹に贈る」に云う「吾 知る 十年の後、季子の黄金多きを。」と。金の多

きは何ぞ道うに足らん。又た名位を以て人に期する者より甚だし。此れ達夫 偶然に漏逗せし処なり。)

訓読を示した後半部分について、「漏逗」は俗語で、「破綻をあらわす。ボロを出す。」の意味であり、荒井健氏は「俗っぽさを暴露した」と訳される。つまりこの批評では、金銭的成功への言及・期待によって激励することが通俗的であると批判されており、また、高位高官としての名声や地位をもって激励することも、金銭的成功ほどではないにせよ批判されている。しかし批判されているということは、とりもなおさずそれが高適の送別詩の措辞の特徴であることを示しているとも考えられよう。たとえ通俗的と誇られようが、高適の送別詩においてはむしろそのような態度こそ持ち味であったと言える。敢えていうならば「偶然」ではなく「必然」に近く、意図的である。それを杜甫が特徴として捉えたのだと考えたい。

ところで、三例目「饒宋八」詩の冒頭六句には次のようにある。

睹君濟時略 君の濟時の略を睹れば

使我氣填膺 我が氣をして膺を填めしむ

長策竟不用 長策 竟に用いられず

高才徒見稱 高才 徒に称せらる

一朝知己達 一朝 知己に達し

累日詔書微 累日 詔書もて微せらる

才能がありながらも不遇であった宋八が嶺南五府経略採訪使・彭果に認められてその判官となる部分の描写で、彭果を宋八にとつての「知己」と表現する。すでに述べた高適詩に見られる「知己」へのこだわりを示す例であり、また、「送高」詩において高適が「国士の知」となる経緯と類似している。布衣や志を得ない前職から節度使等の僚佐となるという途は、当時の士人たちにはよく見られることであつたと思われる。ただ高適がそれにまつわる描写に「知己」という語を用いていることを、杜甫は踏まえたのではないかと考えられる。

*

第二十七・八句「驚風 鴻鵠を吹き、相追隨するを得ず。」について。相手をおおとりに喩え、その後が続くことができなるとする比喩はあるいは常套であるのかもしれない。敢えて高適詩に関連する作品を求めれば次の通りである。「自淇涉黄河途中作十三首」其二(63頁)を掲げる。

清晨泛中流 清晨 中流に泛かび

羽族滿汀渚 羽族 汀渚に満つ

黃鵠何處來 黃鵠 何処よりか來たる

昂藏寡儔侶 昂藏 儔侶寡し

飛鳴無人見 飛鳴 人の見る無く

飲啄豈得所 飲啄 豈に所を得んや

雲漢爾故知 雲漢 爾が故知なり

胡爲不輕舉 胡爲なんすれぞ 輕拳せざる

高適は開元二三年に長安に赴き制科を受験するも落第し、その年あるいは翌年から淇水のほとりの別業に寓居し始める。数年後、別業での生活を切り上げ、淇水を経て黄河を涉って南岸の滑台（滑州の治・白馬県（河南省滑県付近）の州城）に至り、その後、住み慣れた宋州へ戻ってゆく。その途中の作品である。「羽族（鳥たち）」が、みぎわや中洲といった居るべきところを得て群がるのに対して、どこからともなく飛來した「黃鵠（おとり）」は、「昂藏（意気盛ん）」だが連れだつ友がない。孤高な黃鵠は、もちろん高適自身の形象であり、飛んだり鳴いたりしても誰からも注目されず、水を飲み餌をついばむ場所さえもないというのは、当然、自己の才能が正当に評価されていないことの比喩である。してみると羽族を、才能・実力もないのにその場所を得ている小人たちの形象とよむこともできよう。

懷才不遇の自己をおおとり形象する例としては、ほかに「別董大二首」其二（80頁）がある。

六翻飄飄私自憐 六翻 飄飄 私自に憐れむ

一離京洛十餘年 一たび京洛を離れて十餘年

丈夫貧賤應未足 丈夫 貧賤 応に未だ足らざるべし

今日相逢無酒錢 今日 相逢いて酒錢無し

『韓詩外傳』（卷六）に「夫鴻鵠一舉千里、所持者六翻爾。（夫れ鴻鵠の千里を一舉するに、恃む所の者は六翻のみ。）」とあるように、起句で、詩人の「六翻（つばさ）」として意識されている翼は、おおとりのそれであろう。鳥一般ではありえまい。おおとりであるからこそ、不遇の現況が自己の才能との落差として強調されるのである。つまりこの詩においても、起句・承句で自己の不遇の経歴を述べるにあたり、自らをおおとりが「飄飄（空をたたよう）」と比喩していることになる。

このようにその詩において自らをおおとりに喩えた強い自負の表現を承けて、杜甫は高適を追隨することのできない「鴻鵠」に形象したとは考えられな
いであろうか。

*

第二九・三十句「黃塵 沙漠を翳い、念う 子の何か当に帰るべき」については、「別董大二首」其一（79頁）にもよっているのではなからうか。

十里黃雲白日曛 十里の黃雲 白日曛す

北風吹雁雪紛紛 北風 雁を吹いて 雪紛紛たり

莫愁前路無知己 愁うる莫かれ 前路に知己無きを

天下誰人不識君 天下 誰人か君を識らざらん

第一句の「黃雲」については、水谷誠氏が辺境はもとより北中国に見られる黃塵雲、風によって吹き上げられた雲状の黃塵であることを考証されている。そうならば第一句は、「送高」詩の第二九句と類似の描写とできよう。ただ杜甫の詩句は、水谷氏が「黃雲」の用例としてあげられた江淹「雜體詩三十首古別離」（『梁詩』卷四）「遠與君別者、乃至雁門關。黃雲蔽千里、遊子何時還。（遠く君と別る者あり、乃ち雁門の関に至らん。黃雲 千里を蔽い、遊子 何時か還らん。）」の後半二句を直接の典拠として考えると考えられる。少なくともその表現において江淹詩が強く意識されていたことは間違いないからう。江淹詩が離別をテーマとし、「遊子」の場所が雁門関という辺境であるという点からもその可能性は高い。またこれと同様に、離別というテーマを共通にしている点から、高適「別董大」詩の起句の基づくところも江淹詩と考えられる。杜甫が高適詩に直接に依拠したとまでは言えないが、高適の赴く辺境の風景を描くのに、江淹詩の発想を取り入れたのは、同じ詩に依拠するとおぼしい作品が高適にも存在したからではなからうか。

またこの詩が当時、高適の代表作として認知されていたかどうかの資料を論者は見つけ出せていないが、ここにも先に述べた離別の悲哀を抑制し旅立つ者を樂觀的に激励するという態度が明確に現われており、杜甫はこの詩を高適の離別詩の特徴を備えた作品、高適ならではの作品であると認識し、その起句の表現を「送高」詩に取り込んだとも考えられよう。

なお必ずしも制作時期が明らかではない「別董大」詩が「送高」詩より以前おそらく布衣の時期の作であることは、先に引用した其二に、酒を買いお金さ

えない貧窮の有様を歌っていることから判明しよう。

*

最後の第三一・二句「辺城 余力有らば、早く寄せよ 従軍の詩を。」について。「従軍の詩」は、有名なものとしては、『文選』にとられる魏・王粲「従軍詩五首」(巻二十七)、晋・陸機「従軍行」(巻二十八)が、その詩語の基づくところとしてまず挙げることができよう。前者は、建安二十年(二二五)から二一年にかけて曹操が張魯や孫權を攻めた時、王粲が侍中として従軍し、曹操を称えるために作った作品であり、後者は、遠征に従軍する兵士の辛苦を歌うものである。

さてこの二句は、万里の長城や黄河流域の北方あるいは西域といった辺境地帯での旅遊・生活の経験がない杜甫にとって、高適の従軍の詩つまり辺塞詩を、自己の詩作に反映しうる国境地帯の貴重な情報源として期待していたことを表わしているのではなからうか。つまり高適の辺塞詩に、国境地帯に関する情報性を見出したと思われるのである。先に述べたように、高適は二度にわたり東北の辺境を経験しており、そこを舞台とした辺塞詩を制作している。辺境を實際に踏査した経験に基づく辺塞詩群が高適の詩歌のいわば特異性であると、杜甫が認識していたことは間違いないからう。そして、この度、西域の国境地帯へ赴任する高適の現地での詩作を、杜甫は、自らの詩作に反映すべき情報源として期待していたと考えられまいか。文筆の才が求められる節度使の掌書記、文書課長として辺境に赴く者に、「従軍の詩」を送ってきてくれと依頼するのは、あるいは当たり前の挨拶かも知れない。しかし私はこの二句に、杜甫の高適文学に対する評価を認めてよいと考える。

天宝期は、節度使たちの功名争いのための無益な戦争が国境地帯で繰り返され、それが王朝や社会に深刻な問題や矛盾を生みだしていた。その最もの犠牲となったの民衆であり、杜甫は「兵車行」(巻二一三頁)、「前出塞九首」(同・一一八頁)、「後出塞五首」(巻四・二八五頁)などの国境地帯の戦争にまつわる社会詩を制作して、いわば民衆の代弁者として為政者に対して告発を行なう。そのような詩作の栄養源、情報源のひとつとして高適の辺塞詩が期待されていたと考えることはできないであろうか。

高適の東北辺境における作品あるいはその見聞をもとにした作品としては、既に挙げた「塞上」、「營州歌」、「睢陽酬暢大判官」のほか、一度目の東北辺境

旅遊の時の「薊門五首」(三五頁)のときの体験を反映した代表作の「燕歌行」二度目の時の「自薊北歸」(一八七頁)、「薊中作」(一八八頁)などが挙げられる。さて高適が「送高」詩を贈られて河隴に旅立ったあとの杜甫の作品に「寄高三十五書記」(巻三、一九四頁)がある。天宝十二載、長安から河隴の高適におくったものである。

歎息高生老 歎息す 高生老いて

新詩日又多 新詩 日に又た多きを

美名人不及 美名人 及ばず

佳句法如何 佳句 法 如何

主將收才子 主將 才子を收め

崆峒足凱歌 崆峒 凱歌足し

聞君已朱紱 聞く 君 已に朱紱と

且得慰蹉跎 且つ蹉跎を慰むるを得

「崆峒」は河西節度使のおかれた涼州の西に位置する山の名前²⁶⁾。吉川幸次郎氏は、この詩の第二句より、この詩が「送高」詩末において求めた「従軍の詩」が高適から届いたのに答えたものとされる²⁷⁾。長安と河隴とに遠く隔たった後も、両者の間で詩歌のやりとり、文学的交流が続けられていたと判断できる。さらに前半四句より、高適の詩歌に対する杜甫の評価が高いものであったことが知られる²⁸⁾。次に第六句の「凱歌」は、天宝十二載、哥舒翰が吐蕃との戦いにおいて勝利し、肥沃の土地である九曲(青海省西寧市より南方の黄河の南岸一帯)を獲得したのをことほいだ作品「同李員外賀哥舒大夫破九曲之作」(二三〇頁)や吉川氏が指摘される「九曲詞三首」(二三二頁)を指すと考えられる²⁹⁾。高適より届けられた「従軍の詩」の中には、当然、これらの「凱歌」も含まれていたと考えられる。ここでは二首の「凱歌」のうち前者を掲げる。

遙傳副丞相 遙かに伝う 副丞相

昨日破西蕃 昨日 西蕃を破ると

作氣鞏山動 気を作して 群山動き

揚軍大旆翻 軍を揚げて大旆翻る

奇兵邀轉戰 奇兵 転戦を邀え

連弩絶歸奔 連弩 帰奔を絶つ

泉噴諸戎血 泉は諸戎の血を噴き

風驅死虜魂 風は死虜の魂を驅る
 頭飛攢萬戟 頭飛 万戟に攢り
 面縛聚轅門 面縛 轅門に聚る
 鬼哭黃埃暮 鬼は哭す 黄埃の暮
 天愁白日昏 天は愁う 白日の昏
 石城與巖險 石城は巖とともに險しく
 鐵騎皆雲屯 鐵騎 皆 雲屯す
 長策一言決 長策 一言にて決し
 高蹤百代存 高蹤 百代に存す
 威稜懾沙漠 威稜 沙漠を懾れしめ
 忠義感乾坤 忠義 乾坤を感じしむ
 老將黯無色 老将 黯として色無く
 儒生安敢論 儒生 安くぞ敢えて論ぜんや
 解圍憑廟算 解圍 廟算に憑り
 止殺報君恩 止殺 君恩に報ず
 唯有關河眇 唯だ有り 関河の眇として
 蒼茫空樹墩 蒼茫 樹墩空し

第一句の「副丞相」は、哥舒翰。彼が兼ねていた御史大夫が秦・漢において副丞相であったことによる。第十三句の「石城」は、石堡城(青海省西寧市西)で振武軍が置かれていた。末句の「樹墩(敦)」は石堡城の西で、吐蕃の城。さてこの作品には、唐朝軍の偉容と戦法、戦い敗れた異民族の様子がその見聞に基づいて様々な角度から細部にわたって描かれていると言えよう。またもちろん詩的誇張はあるが、この頌詩を読む者にとってはいわば唐朝軍戦勝勝利の現地レポートのようでもある。その戦闘は「作氣」の聯から「石城」の聯において具体的に描かれているが、特に注目すべきは「泉噴」以下の三聯に見られる極めて残酷な描写であろう。「泉噴」の句は水源から血が噴き出すほど吐蕃兵に対する大量殺戮がなされたことをいう。「面縛(後ろ手に縛る)」の句は敗残の吐蕃兵がに捕虜として収容されている様子を歌い、「頭飛」の句は、はねられた首があまたのはこに突き刺さっている様をいう。「鬼が哭し」「天が愁う」のは戦闘が極めて激しかったためである。このような残酷な描写は、やはり辺境での戦闘を間近で経験しなければ、なしえないものであると考えられる。なお「鬼

哭」の聯と「風驅」句の不気味さは杜甫「兵車行」(天宝十一載)の末二句「新鬼煩冤舊鬼哭、天陰雨濕聲啾啾」(新鬼は煩冤し 旧鬼は哭し、天陰り雨湿れば 声啾啾たり。)に通ずるものがある。

いまこのような河隴から届けられた高適の辺塞詩を杜甫が自らの作詩にどう反させたかは論ずる準備がないが(少なくとも右の頌詞は主題的には杜甫の厭戦系の作品とは相反する)、杜甫が高適の辺塞詩に期待していた辺境に関する情報源となりうるものであったことは確かであろう。

また高適には「自武威赴臨洮謁(空格)大夫不及因書即事寄河西隴右幕下諸公」(220頁)と題する作品がある。この詩は、「送高」詩制作以前、天宝十一載、高適が初めて河隴の地に来た時の作品である。この詩は『P2552唐人選唐詩殘卷』に見えるものであり、詩題の「大夫」の上の空格には高適の事跡から考えて「哥舒(翰)」が入る。

浩蕩去鄉縣、飄飄瞻節旄。揚鞭發武威、落日臨洮。主人未相識、客子心切切。

顧見征戰歸 征戰より帰るを顧りみ見て

始知士馬豪 始めて士馬の豪なるを知る

戈鋌耀崖谷 戈鋌 崖谷に耀き

聲氣如風濤 声氣 風濤の如し

隱軫戎旅間 隱軫たり 戎旅の間

功業競相褒 功業 競いて相褒む

獻狀陳首級 狀を獻じて 首級を陳ね

饗軍烹太牢 軍を饗して 太牢を烹る

俘囚驅面縛 俘囚 面縛を驅り

長幼隨巔毛 長幼 巔毛に隨う

氈裘何蒙茸 氈裘 何ぞ蒙茸たる

血食本羶臊 血食 本より羶臊たり

漢將仍兒戲 漢將 仍お兒戲

秦人空自勞 秦人 空しく自勞す

立馬眺洪河、驚風吹白蒿。雲屯寒色苦、雪合羣山高。遠戍際天末、邊烽連賊壕。我本江海遊、逝將心利逃。一朝感推薦、萬里從英旄。飛鳴蓋殊倫、俯仰忝諸曹。燕領知有待、龍泉惟所操。相士慙入幕、懷賢願同袍。清論揮麈尾、乘酣持蟹螯。此行豈易酬、深意方鬱陶。微効儻不遂、終然辭佩刀。

訓読部分を中心として、哥舒翰軍の凱旋と捕虜となった異民族の様子が描かれている。「首級（討ち取った首）を陳ね」る描写は残酷であるし、「俘囚」の句は異民族の捕虜を後ろ手に縛って追い立てることを描き、「幼長」の句は捕虜を頭髮の白黒によって幼長の順に並べたことを描く。また「氍毹（異民族の着る毛皮のコート）」を着た異民族が、「血食」の句、牛や羊の肉を生で食うため生臭いにおいをさせるという描写も、従来の辺塞詩には描かれなかった異民族の生態ではなからうか。これも前掲「同李員外」詩と同様、国境での異民族との戦闘にかかる情報源となりうる作品であろう。杜甫は、河隴の地から長安に戻った高適にこの詩を呈せられ、国境紛争に対する関心をより強め、再び河隴に赴く高適を送る「送高」詩末において「従軍の詩」を求める発言をしたと考えられるのではなからうか。

四

以上、雑駁になったが、杜甫「送高」詩の詩句の表現が高適の詩歌に依拠した、つまり高適詩を典故とする作品となっており、かつそれがそのまま高適の文学や人物の特徴を捉えた批評であるということについて、「送高」詩を高適詩によって注釈する方法によって検討してみた。

最後に、いくつか本稿にかかる課題と思しきものを述べて結びに代えたい。まず本稿の試みが妥当であるならば、「送高」詩は、文学史的に見て広義には、「擬」―「效・倣」―「學」などの詩題で制作されることが多い模擬詩（言うまでもなく、模擬は批評行為のひとつである）の手法に通ずるものがあり、模擬詩の流れの中での位置づけを検討されるべきものであろう。模擬詩の解釈は、まず模擬対象に依拠するからであり、その注釈には本稿と同様の方法が試みられることになると考えられるからである。例えば、森博行氏の江淹の模擬詩「雜體詩三十首」にかかる研究では、そのような方法が示されている。ちなみに同様のことは詩の唱和においても言えるだろう。和詩は唱和に基づいて詠まれているのであるから（これも一種の批評行為と言えよう）、和詩の解釈は、まず唱和に拠らなければならぬ。（であるからこそ、唱和が佚してしまった場合、和詩の解釈に程度の差こそあれ困難を来たすのである。）ただここで「送高」詩の場合は、詩題に模擬を意図する語が見られないこと、高適の詩に和したものであるとは必ずしも判断

できないことに注意しなければならないだろう。つまり、本稿冒頭において紹介した伊藤氏、松浦氏の指摘と深く関わることであるが、杜甫詩、ひいては盛唐詩の文学批評的特質を考える場合、詩題において批評を明確に志向しない作品において、本稿が検討したような文学批評の営みがなされていたことに注目してもよいのではないかと思われる。

また、「送高」詩に見られる手法は、杜甫詩における他者の文学の受容という視点とも関係してくるのではなからうか。例えば、加藤國安氏が杜甫詩における庾信詩の受容と発展（これも批評行為のひとつである）について、修辞や語句レベルにおける精密な比較分析を通して論じておられる。杜甫に他者の文学の特徴を把握し、それを自らの文学の表現に活かす性質が強く備わっていたことを示すものであり、「送高」詩は、杜甫文学のそのような特質の文脈の中に位置づけられて検討されるべきものでもあろう。

なお加藤氏の研究に代表されるように杜甫における前代の文学の受容と発展については論究されることが多かったように見受けられるが、同時代詩人からの受容や影響については、さほど論じられることがなかったのではなからうか。少なくとも本稿が試みた詩句レベルでの検討はほとんどなされていなかったのではないかと思われる。論者はいま、杜甫が高適の文学をどのように受容し発展させたかを論じる準備がないが、杜甫が前代の詩人だけではなく、同時代詩人の文学に対しても鋭い洞察力を備えていたことの一端は明らかにできたのではないかと思う。

以上のほかに、杜甫が高適に贈った他の作品でも本稿と同様の方法での分析が可能であるのか、高適以外の同時代詩人に贈った作品ではどうであるのかなどの課題があると思われる。

【注】

(1) 本稿における杜甫詩の引用は全て中国古典文学基本叢書「杜詩詳註」（中華書局、一九七九年）による。その巻数と頁数を示す。

(2) ここでは、詩人についての批評と人物に対する批評的描写を分けて考えた。後者が前者を包括するが、杜甫の詩歌における文学批評的性質を特徴づけるために区別した。その人物に対して詩人としての視点から描写されているときは前者、そうでないときは後者ということになるが、明確に区

別できない場合もある。例えばここに挙げた「飲中八仙歌」の賀知章について、「知章騎馬似乘船、眼花落井水底眠。」という描写は、人物に対する批評的描写であり、そこに詩人評価の視点は無い。一方、李白についての「李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠。天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙。」という描写は、全体としては李白の飲酒による豪放さを捉えた人物批評であるが、第一句は詩作態度に焦点をおいた詩人批評であると考えることもできる。

(3) 『建安詩人とその伝統』第三編「杜甫の詩」第三章「詩家としての杜甫」(創文社、二〇〇二年)。また同書第四編「盛唐の詩」第一章「盛唐の詩にあらわれた文学論の性格」、第二章「盛唐の詩人と前代の詩人—盛唐における文学論の一面—」においても、盛唐詩の文学批評的性質について重要な指摘がなされている。

(4) 『李白研究—抒情の構造—』第四章「詩人としての自己と他者—周辺詩人との交遊をめぐって—」(三省堂、一九七六年)。

(5) 拙稿「杜甫『送高三十五書記』詩の制作をめぐって—高適研究の一端として—」(『山口県立大学国際文化学部紀要』九、二〇〇三年)。

(6) 杜甫と高適の交遊、高適の事跡や作品系年については、本稿では、孫欽善『高適集校注』(上海古籍出版社、一九八四年)の編次と同書所収の「高適年譜」に従う。

(7) 「送高」詩以外の杜甫詩の系年は、四川省文史研究館『杜甫年譜』(四川人民出版社、一九五八年)に従う。

(8) 単父台とは、宋州単父県(山東省單県)にあった琴台。孔子の弟子の宓子賤が単父の長官であったとき、ここで琴を弾いただけで、単父がおさまったという故事がある古跡。なお天宝三載の高適の作品に「登子賤琴堂賦詩三首并序」(注(6)所掲の孫欽善『高適集校注』115頁)「同羣公秋登琴臺」(118頁)がある。

(9) 吹台は、河南省開封市東南にあった。春秋時代、晋の楽師・師曠にまつわる古跡。

(10) 本稿で引用する高適詩は、注(6)所掲の孫欽善『高適集校注』による。その頁数を示す。本文の校異も利用した。

(11) 「少陵先生年譜会箋」(『聞一多全集』第三冊所収、開明書店・一九四八

年版の大安書店影印本、一九六七年)。孫氏「年譜」もこの説を襲っている。

(12) 第二篇「唐代中期の文学批評」第二章「盛唐的詩歌批評」第四節「杜甫」四「沈鬱頓挫及其他」。上海古籍出版社、一九九四年。

(13) 唐前詩の引用は遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』(中華書局、一九八三年)による。その巻数を示す。

(14) 本稿における「送高」詩の各句の出典にかかる記述は、吉川幸次郎『杜甫詩注第一冊』(筑摩書房、一九七七年)に負っている。

(15) 注(14)に同じ。

(16) 松浦友久『漢詩の事典』Ⅲ「名詩のふるさと(詩跡)」(植木久行担当、大修館書店、一九九九年)。

(17) 調査を要するが、功利主義的な交遊という現今の世態を批判的に歌うことが広まっていたのかもしれない。そうであったとしても杜甫には高適詩が意識されていたと思われるのである。

(18) 高適「燕歌行」とそれをめぐる論者の考えについては、拙稿「高適『燕歌行』をめぐって」(『山口女子大学研究報告 第一部人文社会科学』十六、一九九一年)・高適『燕歌行』をめぐって・続(『山口女子大学文学部紀要』創刊号、一九九二年)を参照されたい。

(19) このことに関して、鄭希・王彦明「雄渾悲壯、慷慨悲歌—兼論燕趙文化对高適的影響」(『衡水学院学報』二〇〇七—四)は、高適は二度の燕趙旅遊を通じて燕趙の文化の影響を受け、その詩風が「慷慨悲壯」な特徴を備えるに至ったことを論じている。またその中で杜甫が「送高」詩において高適を「幽并の兒」と表現した理由を、高適の任侠、尚勇が燕趙文化の影響によることを示したものと指摘している。

(20) 離職が任期途中であったことは、注(5)拙稿参照。

(21) 高適詩に認められる強い自負については拙稿「高適の不遇感の諸相」(『山口女子大学文学部紀要』二、一九九三年)を参照されたい。

(22) 『三國志』(陳)登不爲動容、徐喻之曰、登見曹公言、待將軍譬如養虎、當飽其肉、不飽則將噬人。公曰、不如卿言也。譬如養鷹、饑則爲用。飽則揚去。其言如此。(呂)布意乃解。、『晉書』「權翼諫(符堅)曰、……且垂猶鷹也、飢則附人、飽便高颺。遇風塵之會、必有陵霄之志。惟宜急其羈絆、不可任其所欲。堅不從、……」

(23) 注(14) 吉川『詩注』。

(24) 注(18) 「高適『燕歌行』をめぐって」を参照されたい。

(25) 注(14) 吉川『詩注』。

(26) 注(21) 拙稿。引用していない作品の詩題を掲げる。「贈別晉三處士」

(22頁)「別孫訢」(25頁)「送魏八」(58頁)「別董大二首」其一(79頁)「宋中送族姪式顔時張大夫貶括州使人召式顔遂有此作」(84頁)「宋中別周梁李三子」(120頁)「饒宋八充彭中丞判官之嶺外」(131頁)「東平留贈狄司馬」(140頁)「贈別沈四逸人」(155頁)「睢陽酬暢大判官」(177頁)「別王八」(218頁)「同郭十題楊主簿新廳」(265頁)。「知音」が見えるのは「送蔡山人」(127頁)「別耿都尉」(270頁)。

つぎに『全唐詩』により、代表詩人における知己・知音の用例数(詩題・序文を除く)を参考までに掲げておく。知音が0と両者0の場合は数を略す。なおかつて拙稿で示した数字に誤りがあったので、これを以て訂正する。

王績／盧照鄰1／賂賓王1・3／李嶠0・1／杜審言／蘇味道／王勃1／楊炯2／宋之問1／沈佺期2／陳子昂／張說／張九齡2・1／孟浩然3・5／李頎2・1／王昌齡1／王維0・3／李白3・7／儲光羲8・3／劉長卿5・2／杜甫7・7／岑參6・2／蕭穎士1／元結1／錢起10・12／皇甫冉1／独孤及／顧況1／郎士元1・1／戴叔倫4・2／韋應物0・2／韓愈1・5／司空曙／李端1・1／王建0・1／盧綸／李益0・1／孟郊2・8／權德輿3・3／張籍0・2／白居易4・5／劉禹錫4・7／李紳0・1／柳宗元／姚合3・2／元稹／賈島1・10／沈亞之／李德裕／李賀／許渾4・2／盧仝1・2／杜牧1・1／温庭筠／陸龜蒙／李商隱1・1／李群玉1／皮日休1／羅隱8・7／韋莊1・2／司空圖1／韓偓1／杜荀鶴6

(27) 注(21) 拙稿。

(28) 詩序に「初顔公任蘭臺郎、與余有周旋之分、而於詞賦特爲深知。洎擢在憲司、而僕寓於梁宋。今南海太守張公之牧梁也、亦謬以僕爲才、遂奏所製詩集於明主。而顔公又作四言詩數百字並序、序張公吹噓之美、兼述小人狂簡之盛、遍呈當代羣英。況終不才、無以爲用、龍鍾蹭蹬、適負知己。夫意所感、乃形於言、凡廿韻。」とある。傍線部に、当時の睢陽太守・張九臯

が高適の詩文を玄宗に推薦し、それに顔真卿が詩と序をつけて諸公に披露したことが述べられている。

(29) 「高適の離別詩について」(大阪市立大学中国文学会『中国学志』蒙号、一九八九年)。

(30) 注(21) 拙稿。

(31) 『文学論集』(朝日新聞社、一九七二年)。

(32) 「自淇涉黄河」詩の制作背景や概要については、拙稿「高適『自淇涉黄河途中作十三首』について―淇上の高適―補稿」(『山口県立大学国際文化学部紀要』十、二〇〇四年)を参照されたい。

(33) 「十里黄雲白日曛―黄雲」ノート」(『中京大学教養論叢』二六―一、一九八五年)。

(34) 注(14) 吉川『詩注』では典拠として示されていない。

(35) 早くは劉開揚『高適詩集編年箋註』(中華書局、一九八一年)に指摘されている。

(36) 注(14) 吉川『詩注』。

(37) 『杜甫詩注第二冊』(筑摩書房、一九七九年)。

(38) 伊藤正文氏は、杜甫の高適に対する傾倒を論ずる中で、この四句について「これは単なる社交辞令ではない。杜甫ほどの人間だ、めったな人間に『佳句法如何』などと訊きはしない。」と述べている。注(3)「盛唐の詩にあらわれた文学論の性格」。

(39) 注(37)に同じ。

(40) 六朝期の模擬詩については、安藤信廣『庾信と六朝文学』第二部「庾信の文学」第二章「擬詠懐二十七首」の方法」第一節「擬」と「詠懐」の方法」二「擬」の文学的意味」(創文社、二〇〇八年)、和田英信「模擬と創造―六朝雜擬詩小考」(『集刊東洋学』一〇〇、二〇〇八年)がある。

(41) 「江淹『雜體詩』三十首について」(『中国文学報』二七、一九七七年)。

(42) 唱和詩については、齋藤茂「古人への唱和―宋代唱和詩の新たな意義―」(第二十回中唐文学会における講演、二〇〇九年十月九日)において、模擬詩とも関連づけて、様々な視点からの問題提起がなされた。

(43) 「杜甫に於ける庾信―その受容と発展―(安史の乱以前)」(『集刊東洋学』四八、一九八二年)、「杜甫に於ける庾信―その受容と発展―(安史の乱)

秦州期)」「『愛媛大学教育学部紀要第Ⅱ部 人文・社会科学』十五、一九八三年)、「成都期の杜甫と庾信文学」(『日本中国学会報』三七、一九八五年)。

(中国文学)

【附記】本稿は、平成21年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(課題番号：20520336)の助成を受けたものである。

Criticism on Gao Shi in Du Fu's *Song Gao Sanshi Shuji*

KAWAGUCHI Yoshiharu
(Chinese Literature)

中国古典詩歌中の文学批評自盛唐時期開始隆盛。盛唐詩人中, 杜甫詩歌最有文学批評的特徵。本稿研討杜甫《送高三十五書記》一詩的以下兩点。一点是該詩以高適詩歌為典故（《送高》詩的詩句基於高適詩歌而構思、表達), 另一点是該詩同時也評論高適的文学及人物的特徵。

